

見えにくさへの支援 7

～さまざまな見えにくさの状況を理解する～

“見えにくい”と一言で表現しても、その状態象は人によってさまざまです。そのため、配慮を行うには、どのような見えにくさの特徴があるかを知る必要があります。今回はその様子の一部をご紹介します。

例えば・・・

- ✚ すりガラスを通して見ているような状態。
- ✚ 視野の一部分や中心部が見えなくなっている状態。視野の一部または全体が狭くなっていることもある。
- ✚ 明るい場所が苦手(羞明:しゅうめい)。逆に暗い場所は見えにくくなる(夜盲:やもう)。
- ✚ ピントが合っていないピンボケ状態。
- ✚ 眼球が自分の意思とは無関係に小刻みに揺れてしまう。
- ✚ 色が分かりにくかったり、白黒テレビのような見え方をしていたりする。 **など**



こうした見えにくさにより、具体的に次のような困難が生じやすくなります。

- ✚ ハサミで紙を切ったり、工作をしたりすることに時間がかかる(目と手の協応)。
- ✚ 球技など動くものに合わせて体を協調させる運動が苦手(目と体の協応)。
- ✚ 立体感や奥行きを理解が苦手。
- ✚ 色のコントラストがはっきりしていないと、イラストと文字が重なると読みづらい。
- ✚ 境界がはっきりせず、階段やエスカレーター、曲がり角が分かりにくい。
- ✚ 細かい部分が分かりにくく、似たような文字(“め”と“ぬ”、“考”と“孝”など)や画数の多い文字を間違いやすい。
- ✚ 遠くの景色がよく見えなかったり、大きな建物などの全体像を把握しにくい。
- ✚ まぶしくて運動場で活動しにくい。教室でもカーテンをしないと黒板が見えにくい。
- ✚ 薄暗い部屋では足元が見えにくく、引っかけたり足をぶついたりしやすい。
- ✚ すれ違う時に、すぐに誰か判別することが難しい。 **など**

子どもによっては、こうした困難さを複数抱えています。見えにくさはその困難さを持たない人にとっては実感できないため理解しにくいものです。また、子どもの場合、自分の見え方が普通であり、みんなも同じように“見えている”とっていて、「見える？」と尋ねられると「見える。」と答えることがあります。まして、幼ければ自分の見え具合について説明することも難しいため、発見が遅れがちです。

そして、こうした具体的な場面での困難さに対して、ご家庭ではなるべく床に物を置かないといった環境を整えたり、在籍する園や学校では座席を前の方にしてもらったりするなど、先生方と工夫してもらえることを話し合います。

<参考文献>

青柳まゆみ・鳥山由子 編著 新・視覚障害教育入門 シアース教育新社 2020